

ドゥルーズにおける個体化

——ホワイトヘッドとの関連で——

吉澤 保

恐らくドゥルーズはホワイトヘッド哲学の影響をうけ、そこから様々な想をえたことであろう¹。影響関係は描くとしても、ホワイトヘッド哲学にドゥルーズ哲学を対照させることができ、この哲学を理解し評価する上で実り豊かであるのは確かである²。またこれはホワイトヘッド哲学にも新たな考察の可能

¹ ドゥルーズ自身によるホワイトヘッドへの言及は以下参照。Gilles Deleuze, *Différence et répétition* (=DR), PUF, 1968. p. 364; *Le Pli*, Les Éditions de minuit, 1988, pp. 103-112. Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Les Éditions de minuit, 1991, p. 146, p. 198. 『過程と実在』には「反復」、「強度」、「出来事」などの用語の他、概念的にも類比的なものが見出される。ルクレチウス、スピノザ、ライプニッツ、ヒューム、カントなどに触れた箇所もドゥルーズに想を与えたであろう。

影響の大きさが予想されるにも関わらず、言及が少ない点はまさに注目に値する。一般に哲学者は、多少の差はある、同時に哲学史家にならざるをえないとはいえ、ドゥルーズは、哲学史的考察が極めて大きな比重を占めるタイプの哲学者と言つていい。哲学史的考察がそのまま、自らの哲学の表明となっている。ドゥルーズは西洋哲学の歴史を自らの立場からかなり強引に解釈し色分けし、それとの関係において自らの哲学的立場を鮮明に打ち出す。そのドゥルーズが、『差異と反復』での一箇所の言及からホワイトヘッドをよく知っていたことは確実であるにも関わらず、その僅かな肯定的言及以外、『襞』(1988)に至るまで、ホワイトヘッド哲学に触れない。『差異と反復』の巻末では、この著作でのテーマと関係する哲学者がテーマとの関連とともに言及されているが、そこにホワイトヘッドの名はない。ホワイトヘッドへの言及は少なすぎる。例えば『差異と反復』に限るが、フッサールやハイデガーのようにドゥルーズにおいてむしろ否定的に評価される哲学者よりも言及は少ない。『襞』以前に限るなら、肯定的評価を受けていてこれほど言及が少ないのはホワイトヘッドただ一人であろう（スピノザ、ニーチェ、ベルクソンはそれぞれモノグラフィーの対象となる。ドゥンス・スコトウス、ライプニッツは繰り返し言及される）。

ドゥルーズとホワイトヘッドとの関連については、ライプニッツも含めた三者を対象とする以下の論文集を参照。Perspective – Leibniz, Whitehead, Deleuze, J. Vrin, 2006. 以下は、ホワイトヘッドの研究書ながらドゥルーズ（とガタリ）との対比が多い。Isabelle Stengers, *Penser avec Whitehead*, Seuil, 2002. ここでは「欲望する機械」が「現実的実質」に近づけられている。Ibid., p. 369. 以下でも派生的ながら言及される。國分功一郎、「特異性、出来事、共可能性——ライプニッツとドゥルーズ」（一）、（二）、『情況』、第三期四十二号、四十三号、2004年七月号、八・九月合併号。『襞』での言及からもわかるように、ドゥルーズのホワイトヘッド理解はヴァールの影響抜きに語れないだろう。Jean Wahl, *Vers le concret. Études d'histoire de la philosophie contemporaine - William James, Whitehead, Gabriel Marcel*, J. Vrin, 2004.

² 主に受容する陣営が異なるためか、ドゥルーズ研究では（特に日本では）、ホワイトヘッドとの関連は言及されることが少ない（一方はプロセス神学、他方は唯物論、

性を与えよう。

このような考えを多少とも例証するべく、本稿は、『差異と反復』（1968）で示されるドゥルーズ哲学を『過程と実在』（1929）のホワイトヘッド哲学に関連付けることを試みる³。この際両哲学の中心的概念と言つていい個体化に焦点をあてる⁴。このテーマに関するホワイトヘッドの議論に関しては、ドゥルーズの議論との対比で必要な限り取り出すに留める。同じくドゥルーズの議論にしても、ここでその全体像を示すことなどとてもできない⁵。両者

アーナキスム）。

³ 『襞』でドゥルーズは一章を割いてホワイトヘッド哲学を論じている。この際ドゥルーズは、上述のヴァールの研究書に主に依拠して、「出来事」を中心にホワイトヘッド哲学を再構成している。本稿は、ドゥルーズによるこの記述ではなく、直接『過程と実在』に向かう。これは何よりも、ヴァールやドゥルーズ本人によって媒介されたホワイトヘッドではなく、ホワイトヘッドに直接あたることが重要であると考えるからだ。

⁴ 『差異と反復』の「個体化」は確かに、『意味の論理学』ではその言葉自体ほとんど言及されなくなる。また、『意味の論理学』以降は、明示的には「出来事」がドゥルーズ哲学の中心的役割を担うことになる。しかしながら、「個体化」の概念的重要性は決して失われない。「個体化」に含まれていた両義的意味合いは、『差異と反復』ではその肯定的側面だけに焦点をあてられていたが、『意味の論理学』では否定的側面も浮き彫りにされる。しかしながら肯定的側面の方はむしろ、「出来事=特異性=意味」のほうに移されつつも、決して廃棄されていない。その証拠に例えば『千のプラトー』では「実体」、「物」、「主体」などの「個体化」のほかに、もう一種類「出来事」の「個体化」が認められている。ドゥルーズは、ドゥンス・スコトウスを終始「存在の一義性」の議論で肯定的に価値付けるが、「出来事」の「個体化」は、スコトウスから借り受けた「此性 heccéité」の名でも呼ばれている。Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Capitalisme et schizophrénie tome 2 : Mille plateaux*, Les Éditions de minuit, 1980, p. 310, p. 318.

個体化のテーマはシモンドンへの参照を伴うことが多い。シモンドンとの関連は以下参照。廣瀬浩司、「個体化の作用からアーナキーな超越論的原理へ」、『情況』、情況出版、2003年4月号、pp. 208-225。米虫正巳、「ドゥルーズ哲学のもう一つの系譜について」、『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年、pp. 490-512（シモンドンのみならず、ロトマン、リュイエとの関連も見事に考察されている）。ドゥルーズはシモンドンに限らず自然科学的知見を援用するが、それは、「経験的なもの」、「科学的なもの」ではなく、「超越論的なもの」に迫るために他ならない。例えば「卵」は「個体化」のモデルとされるが、「個体化」は後に触れるように、「潜在的」なものからの「現実化」に他ならず、それ自体経験可能なものではない（DR, p. 323）。「卵」さえも絶えず「個体化」を繰り返している。

以下の論稿は、「個体化」に着目して、ドゥルーズ哲学の生成に「大きな転回」があるとする。檜垣立哉、「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について——個体化論の転変」、『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年、pp. 360-379。果たしてこの見解は正しいであろうか。この点は稿を改めて論じたい。

⁵ ドゥルーズの前期哲学や研究動向などについては例えば以下を参照。鈴木泉、「ドゥルーズ哲学の生成 1945-1969」、『現代思想』、2002年8月号、青土社、pp. 125-147；「ドゥルーズ／ガタリ研究・活用の現在」、『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、

の大よその照らし合せを行うことができれば、このささやかな覚書の目的は達成されたことになる。

I. ホワイトヘッド

現実的実質——実体批判

ホワイトヘッドは、西洋哲学の土台を陰に陽に規定してきた「実体 substance」に代えて、「現実的実質 actual entity」を導入する。『省察』の有名な一節で、デカルトは、通りを誰かが通り過ぎてゆくのを自分が窓から見ていると想定する。実際には帽子と外套以外は見えていない。それにも関わらず、自分は本当の人間を見ていると判断してしまう。「しかしながら私は窓から、帽子や外套以外に、何を見ているというのか[いや何も見ていない]。しかしながらこれらの帽子や外套は、自動機械を包み隠している可能性もあるのに」⁶。ホワイトヘッドによれば、この一節の「私」（デカルト）は、精神的「実体」、「特殊 particular」である。「私」は自分とは異なる外なる「特殊」（この「人間」）そのものを知覚することはできない。この精神的「実体」は、「普遍 universal」によってのみ性格づけられる。つまりそれは専ら「主語」であり、「普遍」という「述語」によってしか規定されない。

「実体」はデカルトの定義では「実存するために他に何ものも必要としない実存するもの」であった⁷。つまり「実体」が複数なら相互に独立していて、直接影響を及ぼしあうことはない。デカルトのケースでも分かるように西洋の伝統では、「実体」は「特殊」とされてきた。つまり「個体」とされてきた。

ホワイトヘッドによれば、デカルトの言う「実体」は、アリストテレスの「第一実体」から派生した。「第一実体」は「いかなる主語の述語ともなれず、またいかなる主語のうちにも現前していない⁸」。つまり「実体」は「主語」にしかならず、他のものの「述語」にはならない。「近代哲学はすべて、主語と述語、実体と性質、特殊と普遍によって世界を記述するという難点をめぐって動いている⁹」。

pp. 698-717.

⁶ Alfred North Whitehead, *Process and reality (=PR)*, The free press, New York, 1978, p. 48.

⁷ *Ibid.*, p. 50.

⁸ *Ibid.*, p. 50.

⁹ *Ibid.*, p. 49. cf. *Ibid.*, pp. 157-158.

ホワイトヘッドは「現実的実質」を、「永遠的客体 eternal object」とともに基本的「実質 entity」とする¹⁰。それは「窮極的実在的なもの final real things」である¹¹。つまり「現実的実質」の背後を探しても、これよりも「実在的」なものを見つけることはできない。「現実的実質」は相互にすべて異なり、「世界」はそれらから構成されている¹²。それらはそれぞれ「抱握 prehension」しあっている。つまりお互いに含み合っている。それらはそうすることで更に「結合体 nexus」を構成する。「現実的実質」と「抱握」はそれぞれ「実在的」で「個体的」であるが、更に「結合体」そのものも同様に「実在的」で「個体的」である¹³。ホワイトヘッド哲学では、連帶を本質としつつも個体が消失するのではなく、個体が生成する¹⁴。

このように「現実的実質」は、相互に「抱握」し合う以上、デカルトの言う「実体」とは異なる。「特殊」でありながら、「普遍」のように他の「特殊」の中に入り込む。「主語」であり「述語」にもなる。

主体から客体へ、生成から存在へ

「現実世界」は「過程 process」であり、この「過程」は「現実的実質」の「生成 becoming」とされる¹⁵。「生成」する「現実的実質」は「経験しつつある主体」である¹⁶。つまり、我々は経験する心的主体と考えられているが、それに或る種似ているということだ。しかしそれは上で見たように、精神的「実体」（「私」）ではない¹⁷。もっと重要なのは、「経験」の意味が通常の意味とは異なることだ。それは「意識」を前提とするものではなく、逆に「意識」が「経験」を前提としている¹⁸。「現実的実質」が「主体」であるとは言っても、通常我々が主体的経験とする「意識的知覚」は、「過程において生ずる派生的変容」にすぎない¹⁹。それは「経験の高い方の諸相 the higher

¹⁰ *Ibid.*, p. 25. cf. *Ibid.*, p. 22.

¹¹ *Ibid.*, p. 18.

¹² *Ibid.*, p. 18.

¹³ *Ibid.*, p. 20.

¹⁴ 「個体」、「個体的」、「個体性」という表現はかなり散見される。「現実的実質」のプロセスが端的に「個体化 individualization」とされているところもある（例えば *Ibid.*, p. 165）。

¹⁵ *Ibid.*, p. 22.

¹⁶ *Ibid.*, p. 29.

¹⁷ 通常の意味での「私」はホワイトヘッドの場合「生きている人格 living person」に相当する。*Ibid.*, pp. 106-109.

¹⁸ *Ibid.*, p. 53.

¹⁹ *Ibid.*, p. 162.

phases of experience」において初めて生ずる。

ところで一つの新たな「現実的実質」が「生成」する際、多なる「現実的実質」がそれによって「抱握」されている。新たな「現実的実質」に相關的な「現実的実質」はすべて漠然とではあれ「客体化 objectified」される²⁰。多くの「現実的実質」は「選言的(分離的) 多数性 disjunctive diversity」として、つまり「多様性 multiplicity」としてある²¹。このような多が「客体化」され、一つの「現実的実質」が「生成」する。多から一が生成する。

或る生成する「現実的実質」が「抱握」するのは、他の「現実的実質」だけではない。「永遠的客体」も「抱握」する²²。「現実的実質」が「主体」から「客体」になるのに対して、「永遠的客体」は常に「客体」であり、かつて「現実的実質」であったわけではない。ホワイトヘッドが言うようにそれは「プラトン的形相」であり、専ら「現実的実質」に「進入 ingress」し、それを規定する働きしかもたない²³。「永遠的客体」は「現実的実質」である「神」のうちにある²⁴。

「現実的実質」は「生成」が終った後は「存在 being」となる²⁵。つまりそれは「自己超越体 superject」でもあり、その「客体的不死性 objective immortality」という機能を行使し、いまだ「生成」途上の「現実的実質」によって「客体化」される。「現実的実質」は「主体的には「絶え間なく消え去る」が、客体的には不死的である²⁶」。つまり「生成」を終えた「現実的実質」は他の「現実的実質」の中で「客体」として生き残る。このように「現実的実質」は「生成」し、「存在」に至る。言い換えれば「主体」から「客体」になる。

潜勢からの現実化、多様体

多が一になるとは、「潜勢的 potential」なものが「現実的」なものになることでもある²⁷。「存在」になっている「現実的実質」そして「永遠的客体」は、「多様性」であり「潜勢態 potentiality」である。これらの潜勢的「実質」は「合生 concrescence」して一つの新たな「現実的実質」を作り出す。「「存在」の本性には、「存在」がすべての「生成」にとって潜勢的なものである

²⁰ *Ibid.*, p. 41.

²¹ *Ibid.*, pp. 21-22.

²² *Ibid.*, pp. 22-23.

²³ *Ibid.*, p. 44.

²⁴ *Ibid.*, p. 46. cf. *Ibid.*, pp. 87-88.

²⁵ *Ibid.*, p. 45.

²⁶ *Ibid.*, p. 29.

²⁷ *Ibid.*, p. 22.

ということが属している²⁸」。

「多様性」は、「現実的実質」、「永遠的客体」などの「実質」からなる。しかしながらホワイトヘッドは、個々の「現実的実質」などのもつ「統一性 unity」を「多様性」に認めることがない。それは「選言的多数性」としてある。そして「多様性についてのどんな聲明も、その個々のメンバーについての選言的声明である²⁹」。「多様性」は「現実世界」に対して、単に「選言的関係 disjunctive relationship」をもつにすぎない。

多から一なる「現実的実質」が生成するが、このように「現実的実質」の「所与 datum」になりうるということが、「潜勢的」ということである。「現実的実質」はその「合生」に関わったすべてのものを「潜勢的」なものとするが、自らの「生成」が終った後は、他の「現実的実質」の「合生」に「潜勢的」なものとして関わる。

II. ドゥルーズ

以上見たホワイトヘッドの見解を四点にまとめておこう。現実的実質の生成（個体化）は、1. 実体ではない、2. 多から一への生成である、3. 潜勢からの現実化である、4. 主体化的生成である。ドゥルーズの議論をこれら四点に対応する部分に分けて論ずる。

1. 表象批判

ドゥルーズの「個体化 individuation」は、『差異と反復』の中心概念（本著作が言う「基礎概念 notion」）であり、「差異の概念 le concept de la différence」と「反復の本質」を追い詰める果てに見出される³⁰。それは「理念 Idée」を「現実化 actualiser」する決定因子とされる³¹。ドゥルーズが、ホワイトヘッドのような原子的「現実的実質」を認めているかどうかは看過できない問題であるが、ここではそれに立ち入ることはできない。両者の個体化を対照させよう。

ドゥルーズによれば、「差異」は「表象」の要請に服従させられている。「表象」の世界を成立せしめている「理由の原理の四つの根」は、「同一性」、「類比」、「対立」、「類似」である。「個体化」は、この四つのアスペク

²⁸ *Ibid.*, p. 22.

²⁹ *Ibid.*, pp. 29-30.

³⁰ *DR*, p. 41.

³¹ *Ibid.*, pp. 316-317.

トへの批判と当然無関係ではない。これら「表象」の形式は、『差異と反復』全体で何度も取り上げられて、批判される。

ここではこれらの「表象」の要請を細かく論ずることはしない。煎じ詰めるなら「表象」の論理を支えているのは「概念 concept」に他ならない。この観点から「表象」が簡潔に規定されている箇所が「序論」にある。通俗的ライプニッツ主義に従いながら、「概念」は「無限な内包 compréhension infinie」をもつとされる。これに対応する「対象 objet」は一つしかない。「内包」の「無限性」は「現実的なもの actuel」とされ、「潜在的なもの virtuel」ないし「単なる無際限なもの simplement indéfini」とはされていない。これによって「概念」の契機としての「述語」が、心的「主体」の中で記憶として保存されることが可能になる。つまり「記憶力 mémoire」が可能になる。更に記憶として「再認 recognition」することも可能になる。つまり「自己意識」が可能になる（再認とは、対象の同一性を認めることであり、それは同時に主体の同一性も認めることになる）。「表象」とは、「この二重のアスペクトの下での、この記憶力とこの自己意識とにおいて実現されるような、概念とその対象との関係」である³²。

「概念」の「対象」こそが、通常言う個体であり、ホワイトヘッドの言う「実体」であることがわかる。個体的「対象」が、他の「対象」とどのような関係をもつかはここからは明らかではないが、ともかくも「概念」ないしその「述語」によって規定されているのは確かである。「表象」の世界は、ホワイトヘッドの言う実体—属性という形式に基づくと言えよう。ドゥルーズの「個体化」はここで言う「概念」の個体的「対象」ではない。後で見るが、「個体化」こそが、「表象」の世界を派生的に生み出す。

「表象」の論理は、「個体化」を、「私 Je」、「自我 Moi」——カントの言うような——との共犯関係におく。この論理によれば、「私」は優れた意味での「個体 individu」に他ならず、更には、「再認」、「同定」によって事物の「個体性 individualité」を判断する。つまり「表象にとっては、あらゆる個体性は人称的である personnelle こと（《私》）、ならびに、あらゆる特異性 singularité は個体的であること（《自我》）、が必要である³³」。

以上の「表象」の「錯覚」に反対しつつ、ドゥルーズは自らの「個体化」を導出する。「私」、「自我」との関係を示す前に、ドゥルーズの言う「個体化」が何でないかについてもう一度簡単にまとめておこう。それは「完全

³² Ibid, pp. 20-21.

³³ Ibid, p. 354. 強調 ドゥルーズ。

に構成された個体 *individu tout constitué*」ではない³⁴。これは先ほども触れた「概念」の「対象」に他ならない。言い換えれば「個体化」は「質の付与でも部分の構成でもなく、種別化でも組織化でも」ない。これらは「分化 differentiation」において生起するにすぎない³⁵。「分化」は逆に「個体化」によって引き起こされる。「分化」は「微分化 differentiation」とともに「個体化」という全体的「基礎概念」の重要な要素となっている³⁶。「これが、心的システムに関して喫緊の問題であるのは、《私》と《自我》が個体化の領域に属していることが全く確かではないからだ。《私》と《自我》は、むしろ分化の形態である。《私》は、本来的に心的な種別化を形成し、《自我》は心的組織化を形成している³⁷」。

確かにドゥルーズが評価するように、カントは、「コギト」に「時間という形式」を導きいれることで、「ひび割れた私 *Je fêlé*」と「受動的自我 *moi passif*」という相關的項を、デカルトの精神「実体」に代えた³⁸。しかしながらカントは、「能動的総合の同一性」を「私」に認めて、「表象」の世界を新たな仕方で救っているにすぎない。ドゥルーズの「個体化」はカントが言うような「私」、「自我」ではない。それらをむしろ派生させるものに他ならない。

2. 微分化としての多様体

ホワイトヘッドによれば、「現実的実質」の「所与」となる多とは「多様体」である。多から一が生起する。そして「多様体」は「潜勢的」である。ドゥルーズにもまさに類比的な考えが見られる。「個体化」は、「理念」の「現実化 actualisation」を引き起こすが、「理念」とは「多様体 multiplicité」であり、更に「潜在的」なものもある。それが一になる。またこの一が相互に異なるとされている点でもホワイトヘッドと一致する³⁹。

既に見たように、「個体化」は「表象」の世界を派生的に生起せしめる。「個体化」は「理念」の「現実化」を引き起こすものであることからも予想されるように、「多様体」は「表象」には属さない。「表象」における「概念」ともその「対象」とも異なる。「それに本当の対立は、《理念》（構造

³⁴ *Ibid.*, p. 56.

³⁵ *Ibid.*, p. 318.

³⁶ *Ibid.*, p. 317.

³⁷ *Ibid.*, p. 330.

³⁸ *Ibid.*, pp. 116-118, pp. 178-179.

³⁹ 「このような難点を解消するには、個体化の差異は、単に個体化の場一般として考えられるばかりではなく、それ自体が個体的差異としても考えられるのでなければならないだろう。」 *Ibid.*, p. 324.

一出来事—意味 sens) と表象との間にある⁴⁰」。「多様体」はむしろ「無意識に属する現前化」である⁴¹。

「多様体」は「問題的 problématique」である⁴²。そして「微分的 différentielle」でもある⁴³。それは「微分的諸要素 éléments différentiels」、「微分的諸関係 (比) rapports différentiels」、「(諸関係に対応する) 諸特異点 points singuliers」からなる⁴⁴。ドゥルーズが「多様体」の出現の条件を三つあげている箇所がある。(i) 「多様体」の「諸要素」は、感覚もされず、未規定とされる⁴⁵。これは重要な点である。規定されるなら、「概念」の「対象」となってしまう。上で見たようにこれは「表象」の世界に入ることになる⁴⁶。(ii) これらの「要素」は個々には未規定なままである。このままでは「多様体」から何ら規定が生まれないことになる。ドゥルーズが「微分化」という考えを導入せざるをえない所以である。「要素」は他の「要素」と関係することで、規定可能にならなければならない。「いかなる独立性も存続させることのない相互的諸関係(比)によって——相互的とはいへ——規定されなければならない⁴⁷」。(iii) 「イデア的多様な連結 liaison multiple idéale、微分的関係は、その諸要素が種々の項や形において現実的に具現されると同時に、雑多な時一空連関 relations spatio-temporelles diverses の中で現実化されなければならない⁴⁸」。個々には未規定であった「要素」が相互に関連をもつことで、規定され、そして更にそこから「特異点」が生ずる⁴⁹。「概念」、「可能的 possible」なものに頼ることなく、ドゥルーズは我々の経験の生成を解明しようと試みている。「理念」は「表象」世界を成立させるまでに至らなければならないのだ。

「表象」の「充足理由」、「超越論的(先驗的)原理」が示されなければな

⁴⁰ Ibid., p. 247.

⁴¹ Ibid., p. 248.

⁴² Ibid., p. 218, etc.

⁴³ Ibid., p. 221.

⁴⁴ Ibid., pp. 269-270, etc. これらは以下とも対応している。「量化可能性 quantitabilité」、「質化可能性 qualitabilité」、「ボテンシャルティ potentialité」。「規定可能性の原理 le principe de déterminabilité」、「相互規定の原理 le principe de détermination réciproque」、「十分な相互規定の原理 le principe de détermination complète」。Ibid., pp. 222-228.

⁴⁵ Ibid., p. 237.

⁴⁶ 言語を用いている以上、概念的規定から免れないのではないかという反論も当然考えられる。ドゥルーズはこの点に関して楽天的である。

⁴⁷ Ibid., p. 237.

⁴⁸ Ibid., p. 237.

⁴⁹ 「多様体」では規定が「概念」なしに創出されている。それは「概念」なき「差異」である。

らない（これらは『差異と反復』で何度も繰り返される表現である）。ドゥルーズの「要素」はホワイトヘッドの「生成」済みの「現実的実質」に近づけることができる。更に両者の「多様体」は、我々の表象的経験をむしろ生み出し、「個体化」の条件を作り出すという点で共通している。しかしながら、ホワイトヘッドが「永遠的客体」という「可能なもの」を認めるのに対して、ドゥルーズは認めない⁵⁰。ここに両者の決定的な違いを確認できる。「永遠的客体」を認めることは、超越的ではないにせよ「神」を認めることになる。

3. 潜在的なものの現実化——可能なものの批判

「多様体」は「潜在的」である。これは「現実的」なものに対立する⁵¹。ホワイトヘッドの場合、「現実的」なものに対立するのは「潜勢的」なものであった。

ドゥルーズの言う「潜在的」なものは、「実在的 *réel*」なものには対立しない。「潜在的なものは、潜在的なものである限りにおいて、或る十全な实在性を保持している⁵²」。つまり未規定ではなく、「十分規定 *complètement déterminé*」されている⁵³。しかしながら「完璧に規定 *entièrement déterminé*」されてはいない。デカルトの区別を援用しつつドゥルーズは、ここから、「分化」ないし「現実化」を規定するものを引き出す。これこそが「個体化」である⁵⁴。この点でホワイトヘッドとは異なる。ホワイトヘッドは「潜勢態」を「一般的潜勢態」と「実在的潜勢態」とに分ける⁵⁵。前者は「永遠的客体」からなる。これは「可能」なものであり、未規定である。後者は「現実的実質」からなり、規定されている。「現実的実質」の「合生」には二種類の「実質」がともに必要である。ドゥルーズは言わばホワイトヘッドの「実在的潜勢態」だけで済ませようとしている。このため「微分化」や「システム」などの様々な仕掛けが不可欠になる⁵⁶。

ドゥルーズは「潜在的」なものを「可能的」なものと区別する。(i) ドゥ

⁵⁰ ドゥルーズ自身は「永遠的客体」を、「純粹に可能なもの」でありかつ、「純粹に潜在的なもの」であるとする。*Le Pli*, p. 108.

⁵¹ *DR*, p. 269.

⁵² *Ibid.*, p. 269. 強調 ドゥルーズ。

⁵³ *Ibid.*, p. 270.

⁵⁴ 「理念」から「個体化」へ至るプロセスで、「ドラマ化 *dramatisation*」という契機も橋渡しな役割を担わされている (*Ibid.*, p. 279)。

⁵⁵ *PR*, p. 65.

⁵⁶ *DR*, pp. 154-155.

ルーズによれば、「可能的」なものはまだ「実在的」ではない。そのプロセスは「実在化 *réalisation*」である。「可能的」なものは「概念」とされている。言い換えればそれは「本質 *essence*」（「一般性 *généralité*」）とかわらない⁵⁷。それゆえ、上で見た「概念」の場合その内包は無限であったが、この場合有限なものとした方がいいだろう。問題は、「可能性=概念」とその外延たる「実存 *existence*」（「対象」）との関係である。「実存は、概念と同じものであるが、概念の外にある」⁵⁸。つまり「実存」は「概念」の外延でありながら、「概念」と同じものでしかない。あるいは「概念」と「似ている」ものでしかない。経験論者がよく行う批判のクリシエではあるが、ドゥルーズは、「概念」が事後的に「実存」に似せて作られたと断ずる⁵⁹。「可能的」ものから出発して「実存」を考えるなら、「差異」は「概念によって規定された否定的」なものに留まる⁶⁰。

(ii) 「潜在的」なものは、既に見たように「実在的」であった。「潜在的」なもののプロセスは「現実化」である。「理念」は「潜在的」なものである。「理念」は「概念」ではない。「概念」がもつ「同一性」からは無縁である。「理念」の「実存」（「現実化」されたもの）は「理念」とは似ていない。ドゥルーズは至る所に「概念」から免れた「差異」を作り出そうとしている。「潜在的なものの現実化は、差異によって、発散によって、あるいは分化によって遂行される。そのような現実化は、原理としての同一性とは無縁であり、またそれに劣らず、プロセスとしての類似とも無縁である。

…この意味で、現実化つまり分化は真の創造である⁶¹」。

既に述べたように、ホワイトヘッドの「潜勢態」との違いは明確である。ホワイトヘッドの言う「永遠的客体」は、ドゥルーズの言う「概念」に他ならない。

4. 幼生の主体と受動的自我

ドゥルーズの言う「個体化」をホワイトヘッドの言う「現実的実質」の「生成」（端的に「生成」という点）に近づけうる理由をまとめておこう。(i) 既

⁵⁷ 「理念」は「本質」ではないと繰り返し主張される。これは、「否定 *négation*」、「対立 *contradiction*」、ヘーゲル的「弁証法」を批判することと同断である (*Ibid.*, pp. 242-244, etc.)。ホワイトヘッドも「否定」を派生的なものとする。この点は今回触れることができなかった。

⁵⁸ *Ibid.*, p. 273. 強調 ドゥルーズ。

⁵⁹ *Ibid.*, p. 273.

⁶⁰ *Ibid.*, p. 273.

⁶¹ *Ibid.*, p. 273.

に触れたので十分とは思われるが、「現実的実質」の「生成」も、ドゥルーズの「個体化」もそれ自体、「表象」の世界における個体でも、それに属する述語的規定でもない。(ii) 主にドゥルーズは「個体」ではなく「個体化」という語を用いる⁶²。「個体化」が「プロセス」などと呼ばれている点も指摘できよう。「強度量の本質的プロセスとは、他ならぬ個体化である⁶³」。(iii) 「異化」、「現実化」、「ドラマ化」などの用語もすべて「プロセス」を喚起させる。これらは、「個体化」という「基礎概念」の一部である⁶⁴。

既に見たように、「理念」は「微分化」によって「十分規定」されている。「理念」は「分化」によって「現実化」される⁶⁵。「異化=分化」は、「質 *qualité*」と「延長 *étendue*」、「種 *espèce*」と「部分 *partie*」、の生成に他ならない⁶⁶。「質」、「種」は、「微分的比」に即して、「延長」、「部分」は「特異点」に即して、それぞれ「分化」する⁶⁷。前者は、ホワイトヘッドの「永遠的客体」に、後者は「実在的潜勢態」に、相当すると言えよう。ドゥルーズの考えでは、「可能」なものである「概念」が「質」を提供してはならないのだ。このように「それらは〔質と延長、形相と質料、種と部分〕は、まるで水晶の中に閉じ込められているように個体の中に閉じ込められている。そして個体化の諸差異の、つまり強度の諸差異の、流動する深さの中で、まさしく世界全体が、あたかも水晶球を覗き込んだ時のように読み取られる⁶⁸」。

以上よりわかるように「個体化」には心的内面性が全く欠けているわけではない。確かに既に見たようにそれは「私」でも「自我」でもない。しかしながら「個体化」のプロセスの中で「幼生の主体 *sujet larvaire*」と「受動的自我」が生成する⁶⁹。ホワイトヘッドも「現実的実質」は「経験しつつある主体」であり、そこで派生的に「意識的知覚」が生成するとした。既に見たように、ホワイトヘッドの場合、「現実的実質」は「生成」を終えた後、「存

⁶² 「個体化」に概念的に近い表現としては「個体化のファクター *facteur individuant*」、「個体化の差異 *différence individuante*」がある (*Ibid.*, p. 53, p. 317, etc.)。

⁶³ *Ibid.*, p. 317.

⁶⁴ ここでは生成（プロセス）に関する両者の見解を十分に対比させる余裕はない。ドゥルーズの『意味の論理学』なども対象に含める必要がある。ホワイトヘッドは以下参照。PR, pp. 67-70.

⁶⁵ DR, p. 358.

⁶⁶ *Ibid.*, p. 358, etc. *partie*, *étendue*, *extension* あるいは *partition*, *composition* など用語の使い方には揺れがあるが、ドゥルーズの込める意味は明らかだ (*Ibid.*, p. 276, p. 318, etc.)。

⁶⁷ *Ibid.*, p. 357, etc.

⁶⁸ *Ibid.*, p. 318.

⁶⁹ *Ibid.*, p. 155. cf. *Ibid.*, p. 284, p. 356.

在」となって他の「現実的実質」の「潜勢態」となる。ドゥルーズにはこの考えは見られないように思われる。

結論

最後に両者の個体化論を従来のものとの関連で位置づけておこう。可能なものの（普遍）がいかにして個体になるか（例えば、人間という普遍がいかにしてソクラテスという個体になるか）。近代以前に盛んに論じられた個体化の原理はこれに答えるものである。この原理が問題になりうるのは、実在論（実念論）が前提されているからである。言い換えれば普遍が前提されて始めて、個体化は問題足りうる。唯名論が力をもつにつれて、このテーマは後退してゆく。時代とともに普遍の実在性への信用は失われる⁷⁰。近代において明示的に個体化を取り上げたものとして、ライプニッツ、ショーペンハウアーがいる。ここで個体化を巡る思想史的論争の詳細に立ち入る必要は全くない。

ここでのホワイトヘッドの新しさはいくら強調してもしそぎることはない。一言で言えば個体化論を実体の輻から解放した。従来の議論では、個体化によって個体が生成するとされた。そしてこの個体とは、アリストテレスが規定するような実体に他ならなかった。ホワイトヘッドは、実体という概念を斥ける。個体化こそが、いわば個体である。個体化は主体化であり、そのプロセスにおいて初めて経験が我々に開かれる。生成を終えれば他の生成する個体化の中で客体（述語）として生き残るが、決して実体になるわけではない。個体化自体は、実体ではないため、それだけで実存することはできない。他の個体化との言わばリレー的連鎖によって実存することになる。個体化は、他の個体化を前提として初めて実存することになる。世界は、孤立した実体からなるのではなく、連帶する個体化からなる。

このように個体化論を一新しつつも、ホワイトヘッドはいまだ、可能なものの（「永遠的客体」）を認めていた。もちろん「永遠的客体」はドゥルーズ

⁷⁰ これに相即した、次のような特徴的な傾向を近代化の過程において見て取ることができる。実在論なる語の意味が変質すること（もの res は単なる物体性、物質性に還元される）、普遍が主体の側に組み込まれること（例えば、デカルト哲学の生得性、カント哲学の先天性）。フッサールは、カントに反して、普遍を主体の外に描こうとするが、ここでまた普遍をどこに位置づけるかという古典的问题が復活することになる。ホワイトヘッド哲学が我々からするとあまりに形而上学的に見えるのは、現代哲学では多くは黙して語られない点を明示的に語っているからにすぎない。

の言う「表象」の成立に寄与するだけであるから、単に可能なものの限定だけによって個体が成立するという考えは斥けられている。ドゥルーズは、ホワイトヘッドによるこの個体化論の一新を継承しつつも、それを更に過激にする。つまり可能なものを排除する。ここにドゥルーズの独自性があり、両者の違いがある。この違いの所以は、両者の、言わば哲学についてのイメージの違いに求めることができよう。これについては稿を改めて論ずるつもりであるが、少しだけ述べておこう。人間の高度に知的な働き（例えば再認）は、ホワイトヘッドにあっては、自らの体系から説明すべきものであるが、ドゥルーズにあっては、必ずしもそうではない。両者ともに新しさを説明しようとするものの、ホワイトヘッドは、哲学的に前提されるものを大きくとる（「永遠的客体」）のに対して、ドゥルーズは、この前提を限りなく僅かにしようとする。ドゥルーズは、ホワイトヘッドの実在論（実念論）を唯名論化（あるいは経験論化）したということができるが、その一方で、スピノザやライプニッツが唱える充足理由の原理を大胆にも受け入れているため、経験を単に記述することに留まることができない。経験を超えて、実在論（実念論）とは異なる仕方で、まさに我々の経験の充足理由に迫ろうとする。合理主義の理想と経験論の理想との奇妙な融合をドゥルーズにおいて見ることができる。